
トナカイのエレン

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トナカイのエルン

【Nコード】

N6307F

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

トナカイのエルンは、風邪をひいたミスター・サンタのことが心配でしかたありません。明日はクリスマスだというのに、プレゼントのことも気になります。エルンと、サンタ。そして森の動物たちとのふれあいをほのぼのと描きます。

トナカイのエルン 前編

「エルン、エルンや。ごほっ、ごほっ」

ミスターサンタは苦しそうに、トナカイのエルンをよびました。

「ミスター、どうしたのですか？」

トナカイのエルンは、からだを左右にゆすつてせなかの雪をはらいのけながら、ミスターサンタのねているベッドのところにやってきて、たずねました。

「どうやらわたしは、かぜをひいたみたいだね。ごほっ、ごほっ」

「ミスター、だいじょうぶですか？ どこか痛いのですか？ それとも苦しいのですか？」

エルンは心配そうにミスターサンタをのぞきこみ、じまんの鼻をひくつと動かしました。

「どこも痛くはないけれど、ごほっ、ごほっ。息が苦しくて、熱があるみたいなんだ。ざんねんだが、今夜のしごとは、できそうにないよ、ごほっ、ごほっ」

ミスターサンタは、まっ白なりっぱなひげを、毛布の中に半分かくしながら、そう言いました。

「それはたいへんです。どうしよう、どうしよう。あしたはクリスマスなのに。森じゅうの動物たちも、村のこどもたちも、みんな、あしたを楽しみにまっているのに。ミスターが行かなければ、プレゼントはどうなるのですか？ 朝おきたら、からっぽのくつしたがぶらさがったままだなんて、かわいそうじゃないですか」

エルンは、今にも泣きだしそうです。

まっかな鼻をますますまっかにして、とうとうがまんができなくなつたのか、大つぶのなみだをぽんと石のゆかにおとしました。

なみだはころころと、だんろのところまでころがってゆきました。ぽとん、ぽとんとおちてはころがり、またおちてはころがり。

そして、そのなみだのつぶは、大きなひとつのボールのようなかたまりになって、だんろのほのおに向かってとびこみました。おやおや、火がきえてしまったようです。

エルンは大あわてで火をおこしました。かべぎわにつんであるまきをくべて、どんどんもやします。

「ミスター、ごめんなさい。ぼくが火をけしてしまったから、へやの中がさむくなってしまいました。まさかぼくのなみだのせいできえてしまうなんて、思ってたからです。ほんとうに、ごめんなさい。ごめんなさい……」

エルンはミスターサンタになんども謝りました。でも、ミスターサンタはなにもいいませんでした。

ねむっているようです。ときどき、苦しそうな顔をしながらも、まぶたをしつかりと閉じていました。

「そうだ！」

エルンは、なにかを思いだしたようにすくつかおを上げ、まばたきを3かいすると、パンと手を1かいたたきました。

「ミスター、ちょっと行ってきました。しばらくそのまま、待っていてくださいね」

ねむっているミスターサンタにそつと声をかけました。

外は朝からずっと雪がふり続いています。トナカイのエルンはぶるぶると鼻をふるわせ、まっ白な雪の道をまっすぐに歩いて、タぐれのせまる森の中にきえてゆきました。

エルンは、もみの木がいっぱいはえている森の中を歩いていました。

その間も、雪は降り続いています。形のいいツノにもせなかにも、どどん雪がつもっていきます。

「手も足もつめたいなあ。でも、ミスターはもっと苦しいんだ。こ

れくらいがまんしないといけないよね。そろそろくまのベアールの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンはまつ毛にのった雪をふるい落とし、あたりを、きよろきみまわよると見回しました。

すると、森の中でもひととき大きな家が木と木の間に見えてきました。あそこにちがいありません。

エルンは、まどから明かりがもれている大きな家に向かって、走り出しました。

家の前にやってくると、トントントンと、がんじょうそうなドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもういちど、トントントントンとドアをたたきました。のっしのっしのっしと、家の中から重たい足音が聞こえてきます。まどもみしみしふるえています。

その時、エルンの頭の上の木から、雪がドサっとおちてきました。でも、そんなことなど、まったく気になりませんでした。

「あつ、ベアールだ」

エルンは、それがベアールが起きてきた合図だと、すぐにわかりました。ドアがぎいっとあいて、中からベアールがのっそりと顔をのぞかせました。

「誰だい？　こんなに寒い日にやってくるのは。ふわあーお」

ベアールが眠そうな目をこすりながら、大きなあくびをしました。「ぼくです。トナカイのエルンです。ねむっているところを起こしてしまつてごめんなさい。お願いがあつて、やってきました」

エルンは頭の上にどっさり雪をのせたまま、ベアールをまつすぐに見て言いました。

「それならしかたないね。さあ、寒いから中に入って。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてくれよ。さうて、いったい、何があつたんだい、ふわあーお」

ベアールは木のいすにすわって、また大きなあくびをしました。エルンもとなりのいすにすわり、ベアールがねむってしまったないように、大きな声で、ミスターサンタのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。ベアール、お願いです。どうしたらいいか、いつしよに考えてください」

ベアールはびっくりして目をまんまるに開き、ぎしっと床の音をききませながら、立ち上がりました。

「なんだって！ それはたいへんだ。子どもたちにプレゼントがとどけられないじゃないか！」

もうベアールは、あくびなんかしていません。エルンもいつしよに立ち上がって、うんとうなずきました。

「よし！ いいことを思いついたぞ。ちょっと待っててくれるかい？」

ベアールは、部屋中をぐるぐると歩き回り、何かをさがしています。

そして、指をパチンとならし、あそこだと言うと、台所のたなに手をのばして、つぼを取り出しました。

「このハチミツをあげるよ。ミスターに食べさせてあげるといい」

「ありがとう、ベアール。これを食べるといいんだね？」

「そうだ。栄養たっぷりだから、きつと元気になるよ」

ベアールにもらったハチミツをかかえて、エルンは外に出ました。「ベアール、どうもありがとう。それじゃあ、またね」

エルンはベアールに手をふりました。ベアールもまた大きなあくびをしながら、手をふっています。

エルンは、まっ白な雪の道を森のおくに向かって、どんどん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、きえてゆきました。

エルンは、ベアールにもらったつばを雪から守るように抱えながら、森の中を歩いていました。

雪はまだ止みそうにありません。頭にのった雪をいくらほらい落としても、またすぐにつもってしまいます。

それでもエルンは、からだじゅうが冷たくて寒いのをこらえて、歩き続けました。

「どんどん寒くなってくるよ。でも、ミスターはもっと苦しいんだ。これくらいがまんしないといけないよね。そろそろやぎのメアリーの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは寒さでじんじんする足を、雪の上でくしゅっとふみならし、あたりを、きよろきよろと見回しました。

すると、白い屋根のかわいい家が、木と木の間に見えてきました。あそこにちがいません。

エルンは、えんとつからけむりがもくもくと出ているかわいい家に向かって、走り出しました。

家の前にやってくると、トントントント、まるい形の木のドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもういちど、トントントントとドアをたたきました。

とことこ、とことこつと、家の中から小さな足音がいくつも聞こえてきます。まだから誰かが顔を出してこちらを見ているようです。エルンはその子に向かってにつこり笑いかけました。するとその子はびっくりしたような顔をして、すぐに首をひっこめてしまいました。

しばらくしてドアがぎいっとあいて、中からメアリーと、3匹の子やぎがひょこつと顔をのぞかせました。

「誰なの？ こんなに寒い日にやってくるのは。ぶるぶる」

メアリーが、寒そうに、からだをぶるぶるとふるわせました。子

どもたちも同じようにぶるぶるとふるえています。

「ぼくです。トナカイのエルンです。びっくりさせてごめんなさい。お願いがあつて、やってきました」

エルンは頭の上にとっさりと言をのせたまま、メアリーをまっすぐに見て言いました。

「それならしかたないわね。さあ、寒いから中に入ってちょうだい。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてね。さうて、いったい、何があつたの、ぶるぶる」

メアリーは子どもたちといっしょに干草の上にすわって、またぶるぶるとふるえました。

エルンもとなりにすわり、メアリーと子どもたちに、ミスターサントのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。メアリー、お願いです。どうしたらいいか、いっしょに考えてください」

メアリーはびっくりして目をぱちくりとさせ、がさがさと干草をかきわけて、立ち上がりました。

「なんですって！ それは大変だわ。子どもたちにプレゼントがとどけられないじゃないの！」

メアリーの子どもたちまで、いっしょに目をぱちくりとさせています。

エルンもいっしょに立ち上がって、うんとうなずきました。

「そうだわ！ いいことを思いついた。ちよつと待っててくれるかしら？」

メアリーは台所のたるから何かをくんで、ビンにつめました。それはまっ白な水のようなものでした。

「このミルクをあげるわ。ミスターに飲ませてあげてね」

「ありがとう、メアリー。これをのむといいんですね？」

「そうよ。栄養たっぷりだから、きつと元気になるわ」

メアリーにもらったミルクのビンをかかえて、エルンは外に出よ

うとしました。

すると、子どもたちが、さっきベアールにもらったつばをじっと見ています。

「君たち、これがほしいの？」

エルンは子どもたちに聞きました。

「うん」

と、3匹の子やぎが、声をそろえて言いました。

エルンはしばらく考えたあと、そのつばをメアリーにわたしました。

「これはベアールにもらったハチミツです。子どもたちに食べさせてあげてください」

「あら、いいのかしら？」

メアリーは心配そうな顔をして、エルンに聞きました。

「ミルクがあるからだいじょうぶです。メアリー、どうもありがとうございます。それじゃあ、またね」

エルンはメアリーに手をふりました。メアリーもまたぶるぶるふるえながら、手をふっています。

エルンは、まっ白な雪の道を森のおくに向かって、どんどん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、きえてゆきました。

エルンは、メアリーにもらったびんを両手でしっかりと抱えながら、森の中を歩いていました。

雪はどんどん空から舞いおりてきます。もうすでにエルンのひざがかくれるくらいにまで、積もっています。

それでもエルンは、どんなに歩きにくくても、止まらずに進んで行きました。

「とうとうツノがこおってしまったみたいだよ。なんて寒いんだろ

う。でも、ミスターはもつと苦しいんだ。これくらいがまんしないといけないよね。そろそろきつねのフォクシー又の家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは肩にのつた雪をはらい落とし、あたりを、きよろきよろと見回しました。

すると、森の中でもひときわおしゃれな家が木と木の間に見えてきました。あそこにちがいません。

エルンは、まだからレースのカーテンが見えているおしゃれな家に向かって、走り出しました。

家の前にやってくると、トントントント、きれいなステンドグラスのついたドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもういちど、トントントントとドアをたたきました。

ことごと、ことごとと、家の中から軽やかな足音が聞こえてきます。レースのカーテンもひらりとゆれました。

「あっ、フォクシー又だ」

エルンの思ったとおりです。ドアがすーっとあいて、中からフォクシー又のふわふわのしっぽが見えました。

「誰？ こんなに寒い日にやってくるのは。ふわふわ」

フォクシー又がじまんのしっぽをふわふわさせながら、エルンに言いました。

「ぼくです。トナカイのエルンです。こんなおそくにおじやましてごめんなさい。お願いがあつて、やってきました」

エルンは頭の上にどっさりと雪をのせたまま、フォクシー又をまっすぐに見て言いました。

「それならしかたないわね。さあ、寒いから中に入ってちょうだい。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてくれなきゃ。えっと……。いったい、何があつたのかしら、ほわほわ」

フォクシー又は片手に泡だて器を持ちながら、しっぽを優雅に左

右に振り、エルンを部屋の中に招き入れました。

テーブルの上には、焼きたてのパンケーキがのっていました。とてもいいにおいです。

エルンは、パンケーキに見とれてしまわないように、コホンとせきばらいをひとつして、ミスターサントのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。フォクシーヌ、お願いします。どうしたらいいか、いっしょに考えてください」

フォクシーヌはびっくりして耳を立て、しつぽをすごい速さでぐるぐる回し始めました。

「なんですって！ それは大変。子どもたちにプレゼントがとけられないじゃない！」

フォクシーヌは、泡だて器をテーブルに置き、うでを組んで、じつと何かを考えていました。

「そうだわ！ いいこと思いついちゃった。エルン、これを見て」
フォクシーヌは、テーブルの上のパンケーキのったお皿を持ち上げて、エルンの顔の前に近づけました。

「このパンケーキをあげるわ。ミスターに食べさせてあげてね」

「ありがとう、フォクシーヌ。これを食べるといいんですね？」

「そうよ。材料にたまごとミルクを使っているから栄養たっぷりなの。きつと元気になるわ」

フォクシーヌが用意してくれたパンケーキの入った袋をかかえて、エルンは外に出ました。

「フォクシーヌ。君の食べる分がなくなっていましたね。そうだ。これは、メアリーにもらったミルクです。パンケーキを焼くのに使ってください」

エルンは、ミルクの入ったびんをフォクシーヌに渡しました。

「あら、もらってもいいの？」

フォクシーヌは不思議そうな顔をして首をかしげています。

「パンケーキがあるからだいじょうぶです。フォクシーヌ、どうも

ありがとう。それじゃあ、またね」

エルンはフォクシー又に手をふりました。フォクシーもふわふわのしっぽをふりながら、またねと言いました。

エルンは、まっ白な雪の道を森のおくに向かって、どんどん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、きえてゆきました。

トナカイのエルン 前編（後書き）

こんにちは。童話では初めての投稿になります。

短い連載になります、どうぞよろしくお願いします。

下にありますNEXTボタンをクリックしていただくと後編に移動します。

トナカイのエルン 後編

エルンは、フォクシーヌにもらったパンケーキの入った袋をかかえて、森の中を歩いていました。

雪はまだまだふり続けています。道がどこかわからないくらい雪が積もっているので、まよわないように、木の形をたしかめながら進んで行きました。

「まつ毛も鼻も手も足もこおってしまったみたいだよ。なんて寒いんだろう。でも、ミスターはもつと苦しいんだ。これくらいがまんしないといけないよね。そろそろリスのクルリンの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは鼻にのった雪をふり落とし、あたりをきよきよと見回しました。

すると、森の中でもとても小さい家が、木のえだの上に見えてきました。あそこにちがいません。

エルンは、ドアもえんとつも、何から何まで全部小さい家に向かって、走り出しました。

エルンは袋をわきにかかえ、こごえた手をこすり合わせて、指先をあたたため直しました。

やつのことで、木の上ののぼったエルンは、トントントンと、木の実はリースがかざってあるドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもういちど、トントントントンとドアをたたきました。

つつつつつと、家の中からかすかな足音が聞こえてきます。リスのベルがちりんとなりました。

「あっ、クルリンだ」

ほっとひと安心です。

こんな高いところまでのぼってきたのに、クルリンに会えなかつ

たら、エルンはどれほどがっかりしたでしょう。

ドアがカチャツとあいて、中からクルリンが顔をのぞかせました。
「誰？ こんなに寒い日にやってくるのは。クルクル」

クルリンが床からジャンプして、くるりと1回転しました。

「ぼくです。トナカイのエルンです。こんなおそくにおじやましてごめんなさい。お願いがあつて、やってきました」

エルンは頭の上にどっさりと雪をのせたまま腰をかがめ、クルリンをまっすぐに見て言いました。

「それならしかたないね。さあ、寒いから中に入って。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてよ。さーてと……。いったい、何があつたの？ クルクル」

クルリンは本を持ったまま、ぴよんとジャンプして、今度はくるりくるりと2回転しました。

エルンは低くかがんだまま部屋の中に入りました。立ち上がるとツノが天井にささってしまうので気をつけなければいけません。

クルリンの部屋には本がたくさん並んでいました。

エルンは、クルリンがとても勉強家なのを思い出しながら、ミスターサンタのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。クルリン、お願いします。どうしたらいいか、いっしょに考えてください」

クルリンはびっくりして小さな目をぱちぱちとまばたきました。

そして、くるりくるりくるりと3回転しました。

「なんだって！ それは大変だ。子どもたちにプレゼントがとけられないじゃないか！」

クルリンはジャンプを止めて、指をおでこにあてながら、むむむとつぶやきました。

「そうだ！ いいこと思いついたよ。エルン、ちょっと待ってて」
クルリンはまどぎわにある机に向かってすわり、ペンをにぎって、すらすらと何かを書き始めました。

「これでよし。この手紙を、フクロウのホーリーのところに持って行くといいよ」

「ありがとう、クルリン。これを持って行くといいんですね？」

「そうだ。ホーリーならミスターの力になれるよ。きっと元気になる」

クルリンが書いてくれた手紙を持ってエルンは外に出ました。

「クルリン。勉強のじゃまをしてごめんなさい。そうだ。これは、フォクシーにもらったパンケーキです。勉強のとちゅうでお腹がすいたら食べてください」

エルンは、パンケーキの入った袋をクルリンに渡しました。

「えっ？ こんなにたくさん？」

クルリンはうれしそうに袋の中をのぞきこみました。

「この手紙があるからだいじょうぶです。クルリン、どうもありがとう。それじゃあ、またね」

エルンは、ゆっくりと木から下りると、クルリンに向かって手をふりました。

クルリンも手をふりながら、また1回転しました。

エルンは、まっ白な雪の道を、森のおくに向かって、どんどん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、きえてゆきました。

エルンは、クルリンに書いてもらった手紙を持って、森の中を歩いています。

いつの間にか雪はやんだようです。空を見上げると、雲が切れて、星がまたたいているのが見えました。

最後に残っていた雪雲もどこかに消えてしまい、月が顔を出しました。

月に照らされて、森じゅうが、やみの中にキラキラ輝いています。エルンは立ち止まって森のおくを見ました。右側も見ました。左側も見ました。今、歩いて来たばかりの道もふり返りました。

大変です。ホーリーの家がどこにあるのか思い出せません。エルンはツノを何度かなでて、空を見上げて考えました。

「そうだ。今、思い出したよ。ぼくは、ホーリーの家に行ったことがなかったんだ。だから家がどこにあるのか、知らない。どうしよう。クルリンの家までもどって、たずねたほうがいいのかな」

エルンは自分の足跡のついた道を引き返そうと、ぐるっとからだの向きを変えました。すると、誰かが呼んでいる声が聞こえます。

「エルン、エルン。道に迷ったのですか？ ホーホー」

ちょうどエルンの目の前にある木の枝に、くりくりの目をした丸い鳥がとまっているのが見えました。

「あなたは、もしかして、フクロウのホーリーですか？」

エルンは丸い鳥に向かって言いました。

「はい、そうです。わたしはホーリーです。雪がやんだので、配達がてら森の様子を見に行くところだったのですよ、ホーホー」

「あの……。リスのクルリンに手紙を書いてもらいました。これをあなたに持つて行くようにと言われて」

エルンは手を伸ばして、手紙をホーリーに渡しました。

「どれどれ。なんて書いてあるのかしら」

ホーリーは羽の中から取り出した赤いめがねをかけました。そして、月の明かりをたよりに、手紙を読み始めました。

「ふむふむ。おやおや。それは大変。ミスターがかぜをひいてしまったのね。わたしの仕事は郵便配達。世の中の出来事は手紙でしか信じてないの。うわさはもうこりこり。クルリンの手紙は世界中で一番信用できるわ。さあ、行きましよう。ミスターの家はここからだとずいぶん遠いはず。急いで！ ホーホーホー！」

すると、あつちからも、こっちからも、丸いからだのフクロウが、たくさん飛んできました。

1羽、2羽、3羽。4羽、5羽、6羽。まだまだ飛んできます。
7羽、8羽、9羽。10羽、11羽、12羽……。もう、数えられせん。

エルンは、木の枝のところ狭しとまとっているフクロウを見て、目を丸くしました。

「なんて、いっぱいいるんだろ。ホーリー、仲間を集めて、どうするのですか？」

エルンは不思議で仕方ありません。

「エルン。そんなことは気にしなくてもいいから。ミスターが待ってるでしょ？ みんなも、用意はいいわね。ミスターの家まで全速力で行くわよ」

ホーリーは仲間にそう言っ、びゅんと飛び立ちました。仲間たちも、後について一斉に飛び立ちました。

エルンもぼんやりしていられません。足首をくるくると回して、準備運動をした後、ミスターの待つ家に向かって、雪の上を目にもとまらぬ早さで駆けてゆきました。

ミスターサンタのそりをひく時よりも、ずっと早く走りました。

そして、エルンはやっと、ミスターサンタの待っている家にもどって来ました。ホーリーと仲間たちは一足早く着きました。

エルンはふらふらになりながら、ミスターサンタのそばに近寄りました。どうやら、まだ眠っているようです。

「エルン。プレゼントはどこにあるの？」

一緒に部屋に入ってきたホーリーがききました。

「ぼくが、いつも、寝ている小屋の裏の。ふう。倉庫においてあります。ふう。ホーリー。そんなことをきいて、いったい、どうするつもり、ふう。なのですか？」

エルンはあまりにも大急ぎでここまで帰ってきたので、何度も大きく息をしながら、とぎれとぎれにしか答えられません。

「わかったわ。裏の倉庫ね。エルン。あなたは、まきをどんどん燃やして、ミスターの看病をするのよ。ミスターの目が覚めたら何か食べさせてあげなさい。いい？ わたしは仲間たちと一緒に、プレゼントを配って来るから……」

そう言つて、ホーリーは部屋から飛び出していきました。

次の瞬間、パタパタと大きな羽音がしたかと思うと、すぐにあたりはいつものように静かになりました。

エルンはホーリーに言われたとおりに、まきを燃やして、部屋を暖めました。そして、お鍋に残っていたスープも温めて、夜中に目が覚めたミスターサンタに飲ませました。

小鳥の声がチチチチと聞こえてきます。窓からは、まぶしい光が差し込んでいました。

「ああ、よく寝た」

エルンは腕をのばして、のびをしました。

「あれ？ ここは……」

エルンは腕をのばしたまま、あたりを見回しました。目の前には、ミスターサンタが眠っています。エルンはミスターサンタのベッドの前でうたた寝をしていたことに気がきました。

「たいへんだ！ お日様が出てるってことは、もう朝になってしまったんだよね。ぼくは、ミスターの看病をしていて、そのままここで眠ってしまったんだ。どうしよう。どうしよう。今日はクリスマスなのに、子どもたちにプレゼントを配るの、忘れてしまったんだ」

エルンはあわてて立ち上がり、玄関のドアのところに行きました。今からでも、自分ひとりでプレゼントを配ろうと思ったからです。すると、ドアのすき間に何かがはさまっているのが見えました。

手紙です。

『エルンへ』

そう書いてあります。

エルンは、大急ぎで封筒を開けて読み始めました。

『ミスターの具合はいかがですか？ エルンも、疲れてはいませんか？ プレゼントはちゃんと子どもたちに届けましたよ。安心してください。そうそう、今朝は森のみんなからエルンに渡してくれと次々とクリスマスカードを預かっています。あとで届けに行きますね。それでは、素敵なクリスマスを。ホーリーより』

エルンは思い出しました。タベ森のみんなに相談して、最後にフクロウのホーリーに助けてもらったことを。

エルンは、手紙を胸に抱きしめて、優しかったみんなのことを順番に思い浮かべました。

そして、ベッドの上に起き上がって、につこり笑っているミスターサンタに言いました。

「メリークリスマス、ミスターサンタ」と。するとミスターサンタも言いました。

「メリークリスマス、ミスターエルン」と。

エルンは、生まれて初めてミスターと呼んでもらって、うれしくて、そしてちょっぴり恥ずかしくなって、じまんの鼻を、ぽりぽりとかきました。

トナカイのエルン 後編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

この『トナカイのエルン』は、絵本のイメージで書きました。パス
テル画でも添えて、レイアウトできればいいなと思っています。
ではみなさまも、素敵なクリスマスをお過ごしになってくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307f/>

トナカイのエルン

2010年10月8日15時11分発行